
めえる ういっち

黒猫亭

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

めえる ういつち

【著者名】

N1123F

【作者名】

黒猫亭

【あらすじ】

絶世の美女にして最強の魔女である西園寺優香は私立清應高校の一年生（）。性別を隠して十六年間をトラブルなしで生きてきたけれど、はたしてこのままうまくやつていけるのかな？使い魔「黒子」の視点で語られる現代魔女喜劇。

第1話・自己紹介

はじめまして。まずは自己紹介を。

わたしの名前は西園寺黒子。東日本亜人協和会の理事長であられる西園寺京香さまのお力により生を受け、光栄にも西園寺の姓を与えられた第一階級の使い魔であります。

黒猫と蝙蝠を主たる触媒として生成されたがため、京香さまに黒子と名づけられました。あ、笑つてはいけません。わたしはとても気に入ってるんですから。

ええと、得意技は「隠密」と「飛翔」、「眩惑」と「変化」、それと風の魔術全般。かように強大な能力をたまわったのも、すべてはあるお方をお守りするため……。

順々に説明します。

西園寺家は魔女の名門。魔女であれば国内で知らぬ者はいません。欧洲の魔女界においてもその名は高く、“Witch Saion”と聞けばイコール「東洋の魔女」と誰もが常識のごとく認めるところです。

魔女そのものについても言及しておきましょう。

魔女とは、地水火風ありとあらゆる魔術に長じ、人心を操り四足獸を統べ、重力に抗い、夜空を愉しむ者です。

人間は魔女をモチーフにして気軽に絵本や漫画、小説を書いたりしていますが、現実の魔女はきわめて稀なる存在であり、君主級の吸血鬼に匹敵する魔力を持っています。

魔女といえば「魔女狩り」が歴史的に有名ですね。でも、あれの犠牲になつた魔女はひとりとしていませんよ。焼かれたのはあわれな貧しい農婦ばかり。魔女が本気になつたら、それがどれほど未熟で怠惰な魔女であつても、並みの人間では太刀打ち不可能です。聖

騎士と司祭の混成小隊でようやく五分といったところ。なお、高位の魔女が放つ「魅了」と「眩惑」の力はほとんど「支配」に近いため、聖地保管100年以上の耐魔重装でもまとわなければ、はなから戦いにもなりません。

しかし、それでいて魔女の弱点は「人間」なのです。人間が近寄つてくると……その、激しい頭痛に襲われるらしいのです。これがまさしく頭痛の種。この微妙な体質のせいで、「それでも人間とかよくやつていくべき」とする共存派と、人間を忌み嫌い「天敵として討つべし（頭痛いし）！」とする敵対派とに分かれ、古代より延々ずっとといがみあつてีいるのです。

なお、亜人協和会は、共存派からなる亜人組織で、構成は魔女や人狼、天狗や古狐、吸血鬼や魔人などさまざま。亜人ばかりではありません。人間社会に溶けこめる種族、という意味合いで「亜人」。組織は東日本と西日本とに分かれ、年に数度、会合と茶話会が催されています。なお、こういった人外の存在を知る人間は政府高官など「ぐひとにぎり」。宗教勢力の上層部とも持ちつ持たれつです。

さて、共存派の魔女は歩み寄りの施策として頭痛薬を作りつけてきた一派。あ、ちなみに西園寺家はですね、みなさんもご存知であります「西園寺製薬」を取り仕切っているんですよ。テレビのコマーシャルでも有名な鎮痛剤『ルナール』は人間用ですが、あれの5倍ほどの効果を持たせた『グルナール』というのがあります。魔女用として秘密裏に流通しています。むろん薬局では売っています。『グルナール』は一錠で24時間効き目バツグンのすぐれものなのですが、なにやら誘眠効果も強いらしく、だからか共存派の方々はいつも眠そう。

敵対派には小さな組織がたくさんあり、また組織間の小競り合いも絶えないようで、全貌は模糊としています。

話がちょっとそれたかも。そろそろ本題に。

魔女は「魔女」でありますから、当然のことながら女性しかおりません。出産に関しましては、低級の魔女であれば、気に入つた人間の男性を魔の領域に招きゴーヨゴーヨしてアレなわけですが、高位の魔女であれば「不死の秘術」をもつて自分自身を再構成し、懷胎出産します。君主級の吸血鬼や人狼の王族であれば高位魔女の伴侣として相応なのですが、まあ恋愛の問題はなかなかむつかしいですし、異種配合には危険が伴うとか伴わないとか。まあ、そこらへんの事情はわたしもよく知りません。ええと、ともかく、生まれるのは必ず女性なんです。だつて、魔女ですものね。

さて、京香さまが「不死の秘術」をもつて「出産されたのが十六年前。お子のお名前は優香。^{さやか}神々しいままでにつつくしく、胸をとろかすほどかわいらしい、女の子のような『男の子』なのでした。

前代未聞！　吉兆なのか凶兆なのか、一切が謎。わたしが生を受けたのはその半年後です。京香さまは優香さまを、あくまでも「魔女」として教育していくことを決心されたのでした。

共存派も一枚板ではありませんからね、「男性の魔女」なんて見るみになれば、どんなそしりを受けることやら。しかし、そんな理由から魔女教育＝性別秘密の徹底を決心されたのではありません。優香さまの魔女としての天質は成長を待つまでもなく明々白々だつたのです。禁止魔具の魔力計（魔力計は差別的でよろしくない、と協和会でつねづね問題視されています。見かけは体温計とほとんど同じ）によれば、搖籃のころよりすでに京香さまのお力を凌駕していたとか。つまり、西園寺家の跡を継ぐにふさわしい魔女として期待されもしたわけなのです。

でも、本当の理由は……たぶん、その、優香さまが頭のてっぺんからつま先まで、どこからどう見ても百パーセント女の子にしか見えなかつたからだと思います。超かわいいんです。実際、京香さまは優香さまにもうメロメロ。あれぞまさしく舐犢の愛。もつとも、そのお気持ちは私にだつてわかりすぎるほどわかりますけどね。な

んていうか、可憐で、清楚で、それでいて凜としていて、笑顔がまぶしくて……ああ！ もうたまんない！

ハツ！ 話がちょっとそれたかも。ええと、まじめな話、優香さんが「男性の魔女」であることが公になつてしまつと、ちょっとなにがどうなるかわからないんですよ。共存派の中には西園寺家にねたましい思いを抱いている一族もいなことはないですし、敵対派だつてなにを言い出すやらわかりません。だつて、本当に前例のないことなんですもの。優香さまはそのことについてあまり深くはないことないようにしているみたいですが、でも、やっぱり不安にかられることはあるみたいで……そういうわけで、わたし黒子が優香さまをお守りしなくてはなりません！

わたしの役目は、優香さまが日々を快適に過ごせるようサポートすること。秘密がなにものにもあばかれぬよう、眼を光らすこと……なのです。

さて、前回の説明で、なんとなくでも状況をのみこんでいただけたでしょうか？ こういうふうに、ひとさまにわたくしどもの事情をお教えするには慣れていませんで、たぶんわかりづらいところもあつただらうと思います。

でもまあ、みなさんが魔女その他の人外に接する機会はまずありませんので、ごく大雑把な理解で問題ナシですよ。この世のなかには、そういうね、魔女やら吸血鬼やらの超常種がいて、なんとなく人間社会に溶け込んでいる、と。なかには恣意的に人間たちに害悪をもたらそうとするものもいるけれど、そのほとんどは共存派の猛者によつてすみやかに排除されています。

問題は例の敵対派です。魔女の領域のみでなく、他種族においてもそういう連中はうじゃうじゃいます。あいつらは計画的で非常にタチが悪い。共存派もそれぞれの種族で戦団を組織して対応しています。敵対派とて人間に存在をおおやけにされることは望んでいないので、隠蔽に関してはラクなんですけどねえ……。

あと、そうそう、ときどきあらわれるんですけど、人間のくせに超常種を狩らんとする輩もいます。わたしたちとは異なる仕方で魔術的な攻撃を仕かけてきます。かれらはどうも、なんていうか、こちらの社会性というか、共存派の理念などにはまったくの無知で、しかも「聞く耳持たん！」といったスタンスで襲いかかってくるので本当に困ります。唐突に仕かけられたら、こつちだつてつい反撃しちゃいますよ。というか、正当防衛ですからね。

……それとあと、ええと、なんだろう、事前に知つておいていただきたいことはこのくらいかなあ。基本的には人間と同じように生活してるわけなのですよ。吸血鬼の人（？）たちだって代替血液で間に合わせていますしね。結局のところ、人間たちが形成している

社会にある種の居心地のよさを感じていて、それを尊重していこうと、そういうスタンスです。わたしなんかは、生まれたときから人間社会にどっぷり浸かってしまってますから、テレビとかエアコンとか、自動車とか電車とか飛行機とか、いわゆる文明の利器をありましたように受け入れていて……というか、本当にあたりまえなんですね、感覚的に。人間の友人だって普通にいますし。

そう、人間の友人だっているのです。わたしと優香さまは、東京都は港区の私立清應高校に通う、ごく普通の女子高生なのです。今年の春に入学して、いまは夏休みが終わつたばかり。残暑の厳しい長月。ああ、夏休みが終わつてしまつた……

ちなみに、清應は超名門なんですよ。偏差値すごいですもん。優香さまはともかく、わたしはすっごく苦労しました。京香さまには「もし受からなかつたら“優香専属”から降ろすからね!」って笑顔で言われて、もうどうしたらいいかと……。

でも、優香さまが「いつしょにがんばるわね!」って勉強をみてくれたんですね。ホント優香さまのおかげでグングン成績が伸びていって、中学はなんと次席で卒業することになつたのです。あ、もちろん主席は優香さま。卒業式では「いやあ、お姉さんのおかげだなあ!」って先生に言われて、それだけでもすごくうれしかつたけれど、そのときそばにいらした優香さまが、

「いいえ、先生、黒子自身の努力のたまものです。私も負けちゃいられないぞ!って、切磋琢磨できましたもの。私ひとりでは、きっと清應には合格できなかつたと思ひます」「って、一字一句おぼえています!」。もー!

ハツ！ 取り乱してしまいましたね、スミマセン。

現状は要するに、優香さまの妹として清應にもぐりこみ、とりあえず平和な毎日を送つていい、といった感じです。いつしょのクラスになるのになつといろいろ暗躍させてもらいましたけれど、まあ必要なことなので、優香さまにも怒られませんでした。

優香さまいわくは、

「私たちが本当に、心から人間と共存しようとするなら、人間にとつて脅威である私たちの力を自ら封する覚悟が必要でしょう。それが人間として生活するうえでの礼儀だと思つ。だから、なるべく力を使わないで、黒子にも人間としての生活を楽しんでほしいの。私には、その……秘密もあるし、あなたにそばにいてほしいから、理想論を貫けない弱さがあるけれど、なるべくなら、ね？」とのこと。私の知るかぎり、優香さまが力行使するのは性別を秘するときのみ。本格的な魔術を西園寺邸地下の「学習室」以外で行使したことは皆無です。

あれ、ええと、いま何時かな？ ん、7時……20分？ あれ？ ちょっと、ヤバ！ 支度しなくちゃ遅刻しちゃう！ ゴメンなさい、次回からは実況中継的にわたしと優香さまの毎日を語つしていくので、とにかくいまは、あれ、リボン？ デコ？ ブラウスはこっちに掛かってるから

第3話・モツタイナイ

遅くとも7時45分までには屋敷を出る。

普通の生徒と同じようになるべく電車で通つ。

以上が優香さまとわたしの朝の取り決め。

わたしは「ぐく大雜把に身支度を済ませ、食パンを口にくわえて玄関にすべりこんだ。腕時計を確認 43分！

「おふあおうふおふあこまつむつふあふあ（おはよハジマリマサス
優香さま）ー。」

玄関脇の大窓から庭園を眺めていた優香さまがゆつたりこむりこ振り向いて苦笑する。レースのカーテン越しに朝の光を浴びて、透けるような白い肌をまぶしくかがやかせる優香さまは、魔女なのに天使のようだ。ちなみに、人間があがめる天使とか神さまとかは、いるのかいないのかよくわかりません。まあ、あれらはきっと、心の内に見出される存在なんでしょうね。

「おはよ、黒子。……あらあら、もう、どうしたの？ リボンはズレてるしボタンはかけちがえてるし、それに、その、ふふふ、食パンくわえて登校なんて、まるでマンガじゃなーの」

「あ、もう、その、『めんなれ』

わたしはおつちょいなところがあつてよくない。中学時代もいろんな人たちから「お姉さんを見習いなさい」なんて言われてきた。わたしはもちろん、優香さまを見習つて、というより、お側に控えて優香さまが恥ずかしくないうにしていたいと思っているのだけど、なんでかこう、ドタバタしてしまったのだった。

しゅんとうなだれると、優香さまがスッと一歩近寄つて、リボンのズレをなおしてくれた。わたしは食パンをもぐもぐほおばついて、まったくかわいそうな口状態だ。

「ボタンは自分でなおしてね？」

照れてるような、からかいつつな、微妙なニュアンス。優香さまは両手を後ろ手に組んで、くるつとわたしに背を向けた。

一応、私も男の子だからね。背中がやう語つていた。

ときどきですけれども、優香さまは『自分の性別について語られます。』いわくは、

「私は自分が男なのか女なのか、よくわからなくなることがあるの。もちろん、魔女なんだから、女としての自分をいつも意識しているんだけれど、でもね、そういうふうに意識すればするほど『本当の自分』が心の奥で浮き彫りになるのよ。でも逆に、私は男なんだ！つて、そういうふうな方向付けで自分をとらえるのにも強烈な違和感が生じる。でも、まあ、わたしの場合、生きていく上で性別なんてあんまり関係ないのだけれどね……」と。やう語る優香さまはさびしげで、いまにも消えてしまいそうなはかなさをたたえていました。わたしはいつもなにも言えなくて、抱きしめたいけれどそれもできなくて、ただじつと控えて心に誓つことしかできない。ずっと優香さまのお側にいよう、優香さまを独りにしちゃいけない、と。

わたしはあわててボタンをかけなおし、食パンをたいらげた。

「あの、では、参りましょう。失礼しました」

「ん。今日は……つていうか、今日もいい天気ねえ。すつごく暑そ

「う

空調の効いた邸内にあつても、夏田影の主張する熱氣は「まかし ょうがない。わたしも優香さまも暑いのは苦手だった。

「ああ、黒子はショートボブでラクそつよねえ。私も思いきつて短くしじょうかな」

靴べらを手に取りながら、とんでもなことをおつしやる。

「だめ！ 絶対だめですよ優香さまー。もつたいないですよ。Mo t t a i n a i ですYO！」

「な、そんな、黒子は大げさねえ」

「大げさでないです！ 優香さま、すつじくお似合いなんですからね！ 奇跡のナチュラルウェーブ！ 齧威のローレイヤー！ 最強のアーライン！」

優香さまのゆるふわナチュラルロングは芸術の粋に達している。 ウィッシュハットをかぶられたときのかわいらしさは危険球レベル！ 魔力なしで万人を魅了する！ 優香さまのロングヘアはわたしが 守る！

「な、なんだかよくわからないけど、わかつたわ。とにかくもう、 いそぎましよう。遅刻しちゃうわ」

腕時計を確認すると7時47分。早歩きでないと電車に乗りおくれてしまつ。わたしも自分のローファーに足をせしめ

「こつてらりしゃこまセ」

「わあー。」

いつのまにあらわれたのか、背後から執事の黒崎が見送りの声をかけてきた。

「びつくつさせないでー、いつからセーにいた？」

「黒子嬢、あなたが食パンを咀嚼していたあたりからおりましたよ」

黒崎は人狼の老紳士で、西園寺家の執事として雇われている。とくに上下関係はないのだけれど、一応わたしの大先輩にあたる。

「いつてきます。黒崎さん、いつもお見送りありがとうございました。さ、黒子、行きましょー」

「は、はい！」

なんだか黒崎にしてやられた感じがして気に食わなかつたが、こじで言い合いでしていたら本当に遅刻してしまう。わたしは優香さまにつづき、西園寺邸を後にした。

7時57分。通勤タイムの銀座線の混み具合はもはやスシ詰めどころの話ではない。わたしたちは女性専用車両を利用してるので一般車両よりはまだマシだが、それにしてもヒドイあります。新橋で吐き出されるように降車する人びとの数も異常だ。わたしもそのなかのひとりなのだけれど、「これだけの人間がこのちっぽけな電車に入っていたとは!」と日々驚嘆の念を禁じえない。

優香さまは電車が苦手で、人いきれに酔いがちなのだけれど、「黒塗りベンツで通学なんて感じ悪いわ。それに、乗り換えを含めてもたったの3駅じゃない。もつと遠くから通学している人もいるんだから、あんまり贅沢言っちゃダメよ」とのこと。ウイッヂブルーム（ホウキ）で飛行通学なんてもつてのほか。でも、優香さまほどの魔女が満員電車にゆられて高校に通つてるなんて、なんだかなあ。

『JR線、都営地下鉄浅草線、ゆりかもめはお乗り換えです。』

新橋到着。ばたばたばたばた、人びとのものすごい足音が構内のかん高いアナウンスと入りまじつて、朝の喧騒を強調している。わたしたちは浅草線に乗り換えた。

「眠いなあ」

ぱつりとつぶやく優香さま。魔女用頭痛薬『グルナール』がばつちり効いているようだ。

「大丈夫ですか」

お顔をうかがうと、優香さまはふるふる顔をふり、つづけて両手を上げて伸びをした。

「んんん~。」「めん」「めん、つこぼやこひやつた。いつものことなのにね」

「え、あ、いえ、そんな」

優香さまは「ぐく何気ない動作がかわいすぎる」ので注意が必要だ。わたしは通りすがりに見とれている会社員や男子学生をギロツトにらんだ。

8時17分、清應到着。予鈴の鳴る前とまいていえ、ギリギリだ。

「すみません、優香さま。わたしがちゃんとしていれば、こんなあわただしい朝にはなりませんのに」

遅刻したことはないけれど、結構な頻度で今朝みたいになってしまつ。

「いいのよ。ちゃんと間に合っているもの。それに、黒子は45分までには必ず起きてくれるじゃない。約束を破つたことは一度もないわ。あとね、外では“優香さま”じゃないでしょ?~」

「あ~。」「めんなさい、お姉ちゃん」

そう、繰り返しなになつてしまいますが、わたしは人間社会においては優香さまの妹なのです。戸籍上もそういうことにな

つて い ま す。ホント 光 荒 す ぎ て 鼻 血 が 出 そ う で す。

「ふふふ、行 き ま し ょ 」

「はい……あれ？　あの、あれ？」

校舎に 入 る う と し た の だ が、妙 だ。優 香 さ も 気 づ か れ た り し く、立 ち 止 ま つ て い る。

「変 ね。結 界 ？」

「そ う、で す ね。か な り 歪 な か た ち で す け ど」

魔 力 を 視 神 経 に 集 中 し て 見 る と、微 弱 な 結 界 の 線 が 浮 き 上 が つ て き た。カ モ フ ラ ー ジ ュ さ れ て い る わ ケ で は な く、單 純 に 力 が 弱 い た め 気 づ き に く い。

生 徒 た ち が 立 ち 止 ま る わた し た ち を 不 番 げ に 見 や り な が ら 通 り す ぎ て い く。　あ、言 い 忘 れ て ま し た が、清 應 は 共 学 で す。

「時 間 が な い わ。と り あ え ず わた し た ち の な か で だ け 無 効 化 し て お い て、様 子 を 見 ま し ょ う」

「そ う で す ね。こ の 弱 さ な ら 効 果 が な ん で あ れ 無 効 化 で き ま す し。そ れ に 解 除 し た ら 術 者 に ば れ ち ゃ い ま す も ん ね。で も、な ん で し ょ う ね、ま た 九 鬼 さ ん 関 係 で し ょ う か」

九 鬼 さ ん は 3 年 B 組 に 在 籍 す る 吸 血 鬼、九 鬼 影 雅 の こ と。東 日 本 亜 人 協 和 会 に 所 属 す る 九 鬼 家 の 一 人 息 子 で す。父 母 の 九 鬼 影 光 は 協 和 会 の 戰 団 に 多 く の 戰 士 を 投 入 し て い る 有 力 者 で、な か な か の 人 格 者 で も あ 里 す。表 向 き は レ コ ー ド 会 社・九 鬼 グ ル ー プ の 社 長

さん。ちなみに、西園寺家は代替血液を提供している兼ね合いで九鬼家をはじめとした吸血鬼の名家と友好的です。

ただ、九鬼家と仲がよいといつても、息子の九鬼影雅はぼんぼん育ちのどちら息子といった感じで、わたしは大きらいです。あのナンパ野郎は、なにかと優香さまにちよつかいを……！

「うーん、九鬼さん？　どうかしらねえ。あら、えっと、どうしたの？　怒ってる？」

「へ？　あ、いや、いえいえ、そんなことないですよ？」

ああ、わたしつて九鬼さんのこと、本当にきらいなんだなあ。ちよつと解説しただけで、じう、イライラつとしてしまつ。氣をつけなくては。

キインコオノカアンコオオオ

予鈴の音が響き渡る。

「あらあらこけない、黒子、いそぎましょ！」

「はーー。」

謎の結界の出現……トラブルの予感がする。大切なのは、優香さまの日常を守ること。魔女の力を行使せずに事なきを得ることだ。ぬかるな黒子！

第5話・即戦闘？

新校舎三階の西側に位置する1年A組がわたしたちのクラスだ。本鈴間際の到着となってしまったのだが、教室の引き戸を開けると……なんだろう？ ちょっと雰囲気がおかしい。この時間になると、みんな自分の席に着座はじめるのが常であるのに、今日は立ち話に興じたままで、ワイワイガヤガヤとこやこにうるさい。

「なんか」

妙ですね、と優香さまに声をかけようとしたところ、

「おはよう、西園寺さん。今日はおめでつたね」と、山田の挨拶にさえぎられた。

山田はクラス委員を務める典型的優等生で、優香さまとわたしの共通の友人です。セルフレームのメガネが似合つ、地味にオシャレな文型ガール。わたしの心のなかでは“メガネの山田”。下の名前はなんだつけな？

「おはようござります、山田さん。今日はみんなどうしたのかしら？」

？

優香さまはクラス全体を見回すようにして言った。

「あ、そうなの。あのね、うちのクラスに転校生が来るんですって。めずらしいでしょ？ さつき口説を取りに教員室に行つたときには、先生が『おい、山田、今日は転校生来るからな』って。それで、ここに戻るとき、ちがう制服の女子とすれちがつたの。たぶんこの子だらうなあつて思つて、みんなに話しかけたんだ。そしたらね、

西園寺姉妹よりかわいこ子だつたひびひあるよーつて男子がちわざ
だしちやつてさあ

アハハ、と笑つて答える山田。
転校生？ 夏休みが終わつて数週間が過ぎたいまになつて？ そ
もそも、この私立清應高校に転校なんて不可能なのでは？ あきら
かにおかしい。

キインコオンカアンコオオン

本鈴が鳴つた。

「……ちよつと」

優香さまがわたしの耳もとに口を寄せ、 わせやいた。

「たぶん、あの結界もどきの効果はこれよ。みんな転校生の出現を
受け入れちゃつてる。この学校では考えられないことだわ。いまか
らここに来るであらう転校生が術者にちがいない。“彼女”の目的
がハッキリするまで、わたしたちは魔力を殺して結界にやられてい
るフリをしましよう。もつとも、先方がわたしたちをどうにかしよ
うと思つて潜入しているのだとしたら、最悪の事態も考えておかな
くちゃいけないんだけど……」

「最悪の事態、といつと」

言わすもがな。

「即戦闘よ」

しかたがないとはいって、つらい。のんきな日常を愛する優香さまが、戦闘もやむなしと判断せざるをえない状況に追いやられているのだ。どうしても暗い気持ちになってしまふが、しかたがないことはしかたがない、そのときとなればわたしも全力を尽くす。最善のかたちで勝利せねばならない。“なにものも失つてはならない”のだ。

「では、そのときは即座に記憶操作のための簡易結界を張りましょう。なにも起こらなかつたことに対するためには必要です」

「そうね。それが一番安全な方法だと思う。私は“眼”を使います。相手の力量にもよるけれど、たぶんすぐに拘束できると思つ」

優香さまほどの力があれば、多くの敵対者を無傷で生け捕れる。あとは精神を侵して自由させれば……いやいや、それは、優香さまがすべきことではない。やういうエゲツナイのは、わたしや黒崎の仕事だ。

「ないしょ話？ 朝っぱらから妬けますね。なかよし姉妹もいいけれど、ほじほじにね」

山田がやれやれ、といった感じで肩をすくめて言つた。なかよし姉妹！ なんと甘美なる響きか……！

「いおり、なに赤くなつてゐるのー！」

優香さまは山田に弁解するように、人をし指でちゃんとわたしの額を押し、ニンマリ笑顔で言つた。ちょっとぴり照れてるらしく、わずかに頬を赤らめてくる。ああ、なんかいづ、ものすじくくるものがあるなあ。えへへ。

ガラガラガラ！

教壇側の引き戸が勢いよく開いて、担任のカナミン（鹿波先生）が入ってきた。同時に、生徒みんなが大あわてで移動はじめる。イスや机がガタゴトガツタン、掃除の時間じゃあるまいし、やかましいことこのうえない。喧騒にまぎれるようにして、わたしと優香さまも自席へと向かった。ちなみに、窓際の一番うしろが優香さま、その前がわたしの席です。

「ほらほら席つけ席つけ！ まったく、落ちつきのないやつらだなあ。委員長！」

「は、はい！ 起立！ 礼！ 着席！」

とんとん拍子でいつも朝が展開されていく。しかし、開け放たれた引き戸に認められる転校生の影が“いつも”のままをゆるさない。敵か？ 味方か？ おそらくは敵だ。わたしは簡易結界の呪文を暗誦しながら、囮うべき空間を立体シユミレートした。触媒なしで、陣も描いてないので持続力に乏しいが、優香さまが瞬時に力タをつけてくれれば、その一瞬を中心としてみんなの記憶をこつそり抜ける。あとは拘束した敵を虚空間に閉じこめておけばいい。

「……黒子」

「は、はい」

詠唱イメージを保持しつつ返事をする。

「こきなり襲いかかってこないかぎりは知らんぷりだからね

「は、はい」

「きつと大丈夫よ……」

左肩にそつと手をあてられた。緊張がやわらぐ。そうだ、冷静でいなくては、ここぞというときにトチつてしまつ。きっと、わたしの背中は氣負つてガチガチだつたにちがいない。恥ずかしいつたらない。こんななんじや、わたしの方が守られてしまつ。冷静に、冷静に

「もうみんな知つてゐるだらうが、ここA組に転校生を迎えることになつた。異例中の異例だが、中学時代は関東大会に出場したこともある剣道有段者ということでな、女子剣道部期待の星としてすでに入部が確定してい。その兼ね合いで本校も転校を受け入れたわけだが、もちろん、そういう事情をさつぴいたうえで転校試験を受けてもらひ、これまた見事にクリアしている。文武両道とはまさしく、といったところだな。まあ、とりあえず自己紹介をしてもらおうか。おい」

カナミンにうながされ、引き戸の影が教室に足を踏み入れた。

第6話・冷ややかガール

背丈はわたしより高く、優香さまよりちよつと低い。目算で165センチ程度。ヘアスタイルはいまどきめずらしいポニーだが、高い位置で結んでラフに散らしているのでなかなかオシャレだ。おくれ毛の残り具合が逆三角形のフェイスラインとやや切れ長な“おめめ”によく似合っている。全体的な印象としては「人を寄せつけないタイプの和風美人」ってところかなあ。優香さまのほんわか人を和ませる雰囲気とは真っ向真逆の冷ややかガールだ。あ、制服、セーラー服かあ。一度は着てみたかつたなあ。

……つて！ ルックスチェックしてる場合じゃないよ！

まあ、とりあえず、いきなり襲いかかってくるわけではなさそうだが。

ダン！ と音を立てて教壇を踏みしめる転校生。生徒一同、びくつと身を震わす。

これは……演出だ！

結界の力が総じて微弱な場合、回路を確実に形成し浸透させるのには虚偽おどしも有効。被効果者の意識が単線化すればするほど制圧しやすくなるからだ。つまり彼女は、結界の確認と後押しをしている。なんとわかりやすい拳動か。十中八九、こいつはクロだな。しかし……

「ん？ んんんん？」

転校生の全身を眺め見て、わが目を疑つた。腰に……カタナ？

「……黒子！ 注目しちゃダメ……！」

小声の注意が背中から飛ぶ。そうだ、知らんぷり

「 ！」

一瞬、転校生と視線がバチッと衝突してしまったような気がするが……どうだろ？ 彼女のあごのあたりに焦点をすりし、漫然と見るともなく見る。腰のカタナは消えていた。なんだろ？ 幻術？ なんのために？

「……服部忍と申します。静岡県は御殿場市より参りました。今しがた鹿波教諭よりご説明いただきましたよう、剣道部に所属し本校に貢献したく存じます。以後、お見知りおきを。なにかご質問は？」

教壇に立ち、胸を張つて睥睨し、朗々と言い放つ。みんな金縛りにでもあつたかのように身動きひとつできないでいた。服部は満足げにうなずくと、横目でカナミンをうながした。

「お、ああ、ありがとう。では服部くん、きみの席は一番つしろの真ん中だ。なにかわからんことがあつたら……おい、委員長」

「は、はい！」

「クラス委員の山田だ。とりあえず彼女に聞きなさい。山田、よろしくな。時間があつたら、校内を案内してあげてくれ」

「はい。わかりました」

ふむ。山田を間に挟んで情報収集できるかもしれないな。

国語総合、

数学1、

英語2、

現代社会。

4限終了。

淡々といつもどおりに授業がすすんでいった。とくになにじとも起じこらない。

授業と授業の合間で軽薄な男子が服部にいろいろ質問していたが、けんもほろびにあしらわれていた。隣近所の女子が気遣うように声をかけるのには比較的やわらかい調子で応じていたようだけれど、それでも表情は頑固に硬い。あれがデフォルトなのか。

結界の効果はおそらく「転校生を受け入れるべし」といった感じの、じくシンプルな想念の植えつけだろう。効果がみんなになじんで、事実として定着すれば結界も取り扱われるにちがいない。力の源は結局のところ術者の魔力そのものなので、ただ設置してあるだけでもじわじわ消耗するし、術式構成をたどられると術者の魔力特性や居所が割れてしまうからだ。気になるのはチラッと見たカタナだが、あれは一体……

「うう……しゃかいのじかん、おわったの？」

優香さまのお目覚めだ。優香さまは『グルナール』の服薬により、いつでもどこでも5分以内で寝られるほど睡魔となかよくなられているため、生徒を指さない教師の授業はあっさり放棄しがちなのである。それでいて成績は学年トップなのだから、うらやましいと言ふかなんと言つべきか……

「はい。お休みだよ。学食に行こう」

外では基本的にこの口調。ここまでたつてもなれなくてドキドキしてしまつただれど、決していやではない。ある種の“じつ”遊び”にすがなづくとも、わざとやらせっこ思つて出になるだらうから。

「はれえ？ わざはおぐんとつじや あなかつたあ？」

ふにゃふにゃした口調でズレたことを言つ優香さま。起きたては意外にダメな人なのだ。それにしても、敵かもしれない奴がすぐ近くにいるつていうのに……大丈夫なんでしょう？

「お姉ちゃん、お弁当は両水金でしょ。今日は火曜日だよ。席がなくなつたやつよ」

「やれはいめのひ」

ガタタッと音を立てて起立する優香さま。わたしは手を握つて歩行をつながす（こつものこと）。クラスのみんなの生温かい視線に、射るような鋭い視線がまじつていてに気がついたが、あえて無視。優香さまがここまことにやぐにやにワラックスしていくということは、こまのところ「警戒しない方がよい！」とこつことじだ。たぶん。

「ねつこよむ」

とりあえず、わたしは曖昧な状態にある優香さまの手をひき、地下一階の学食へと向かつた。作戦タイム、かなあ？

第7話・脅威のカレー

清慶高校の食堂は美味しい！

もちろん、西園寺家の料理長の腕前と比べるわけにはいかないのだが、小細工ゼロのごく素朴な味わいが優香さまを魅了しているのである。肉じゃが定食とか、焼き魚定食とか、西園寺邸ではまずお目にかかるないメニューがめじろ押しだ。

ちなみに、中学は公立だったのだけれど、給食ではなく弁当持参が義務づけられていたため、三年間ずっと西園寺ティーストランチだった。牛乳だけ配布されていたのが謎だったな……

「お姉ちゃん、今日はなんにする？ わたしはカツカレー！」

かくいうわたしも、食堂メニューの不思議な味わいに魅せられているのだった。

はじめてこここのカレーを食べたときはあたまが真っ白になつた。西園寺家におけるカレーとちがつて粘度が高く、しかもライスがスマティ米（インディカ種）ではなくアキタコマチ！ それどころか……味わい自体がわたしのなかのカレー感覚にまったくむすびつかない！

以前、山田にその衝撃を伝えたら「睡葉すべきブルジョワがつ！」と罵倒されてしまった。つづけて「あきれたわ。食べたことないのはしようがないにしても、マンガとか雑誌とかテレビのコマーシャルとかでさ、いわゆる“カレーライス”を知る機会くらい、十六年間生きてればいくらもあるはずじゃない」とかなんとか。言われてみればたしかに。しかしそうは言つても、舌で理解すべきことを頭で理解することはできないわけで。

あと、カツカレーに関して言えば、乗つかつてるカツがすごい。衣が異常に厚くて、おそらく油っぽい。単体で食べるとギトギト

で酔つてしまつたのだが、このギトギトが見事カレーとハーモナイズ！ めしむらくは量が多すぎる」とかな。わたしには半分くらいでちゅうどいこんだけれど、残しちゃわる」と無理して食べちゃう。そうすると西園寺邸の夕食を抑え気味にとらがるをえないわけで……なんとなく、料理長に申しわけないような気持ちになつてしまつ。なかなかむずかしいのだ。

「えつと、やうね、私は生姜焼き定食かな。あ、席を確保してあくから、お願いしていい？」

生姜焼き定食か、なかなか渋いチヨイスですね。
どうやら優香さまの眠気は追い払われたようだ。眠いままだと「くひ」とおんなじで「」なので。

「了解。ちゅうと待つてね

「なんだかいつも、わるいねえ……」

お婆さんみたいな口調で優香さまがおどけるので、わたしは思わず吹きだしてしまつた。

「いいのいいのー、それじゃ、席お願いね！」

小さく手を振り別れる。

ハツキリ言つて優香さまは席を確保するのがへタなので、逆の方が効率がいいのだが、優香さまに自分のご飯を運ばせるのは絶対いやだし、それに優香さまにはこういつ……なんていうか、ごちゅうごちやしたせわしない空気になれてもらつた方がいいような気がするのだ。

いつもやつて食券販売機の前に並びながら優香さまを眺めてくると、

もつ足どりからして他の生徒たちとはちがう。ゆつたりしていて、優香さまのまわりだけ時間の流れがおだやかなのだ。ただ眺めているだけで、やさしくしてもらえたような充足感に満たされる。やらかで、あたたかみがある。しかし！ それゆえに……確保しようとした席を後からバタバタやって来た粗野な男子たちに取られてしまつのである（いまさに）！ ああ、でもあのアセアセ困った表情、ホントかわいすぎるよ優香さま……

結局、同じクラスの男子に席を譲つてしまつた。

彼らとしては点数稼ぎの感覚があるのかもしれないけれど、優香さまは他人の好意をまことに善なるものとして率直に感謝し受け入れるので、裏側の意図に対してはまつたくのブラインドなのだ。それに……これはおふざけ気分で言つのではなくて、優香さまは性別の意識を捨ててるから……。

「さて、どうしましょう。黒子のことねたぶん気づかれてるわ

パックのウーロン茶を飲みながら、優香さまはさりと言つた。

「うぐー、ゴホッゴホ

カツがノドにつまる。パックのオレンジジュースに手を伸ばした。

「カレーとオレンジジュースって、合ひの？」

「んぐむ。ハアハア。いえ、まあ。あの、気づかれてるつて……」

「あなたがフツーの生徒ではない、といふこと。つまり、アレが見

えたところ「う」とね

アレとは、あのカタナのことだり。優秀なまはおどりかなかつたようだ。

「うう。じめんなさい。つにびつくじしけやつて」

「いえ、私もおどろいたわ。不可視系のアーティファクトかなと思つたけれど、なにかもつと不安定なもののように感じた。たぶん、私たちの領域外のものね」

「でも、あいつ、人間ですよね。たぶん」

「たぶん、ね。こまのところ、なにもかも“たぶん”よ。」じりじりとしては出方を待つことしかできないしね。ただ、あんまりずるずるグレーゾーンにいられても対応のしようがないから、黒子があいうかたちでチヒックされたのはよかったですのかもしれない

「と、言ひと」

「つまり、服部さんは近々、あなたのことを確認しようとするはずよ。なにもののかをね。彼女の目的がなんであれ、見られるはずのないものを見られたのだから、案外わたしたちよりずっとあせつているかも」

「え、でも、もしかしたらわたしたちそのものが目的……あれ？いや、そうか」

「うん。もしも彼女の目的が私たちをどうにかすることだったら、あんなふうにアレをさらけだして、しかも見られてあわててかくす

よつな」とせしなにせある

「じゃあ、敵ではない?」

「敵になるかもしれない人、といつのが正しいかな」

「なるほど」

「とつあえず」

優香さまが表情を硬くする。わたしはペロッと舌を伸ばした。
「命令を…」

「冷めなこつちて食べひがこまじよ」

「へ?」

「いせさん」

「あ」

優香さまがにっこり微笑む。テーブルに視線を落とせば、わたしも優香さまもまだ半分くらいしか食べていない。

「お姉ちゃんのこじわる……」

よくある」とだが、からかわれてしまった。いやじやなこねび。

「ふふふ」

優香ちゃんの時間はつねにおだやかに流れているのだった。

第8話・常識的な範囲

(1) 先方の接触を待ちつつ、「おはあくまでも一般の生徒を演じる。

(2) 今日の放課後、三年の九鬼さんと会つて本件の情報を共有しておぐ。

以上がお昼休みでの話し合いで決まったこと。

なお、九鬼さんに会つて前に服部が寄つてきても、常識的な範囲でやんわり「ミニミニケーション」を避けておくことにする。もしかしたら、九鬼さん関係のトラブルかもしれないからだ。巻きこまれるのは「めん」である。

九鬼さんには優香さんが、

『こんにちは。西園寺です。校舎を囲つてている結界もどきには当然お気づきでしょ? その件についてお話したいと思います。放課後、お会いできますか? 駅前のスターバックスコーヒーで待つてます。』とメールを送つておいた。

ちなみに、優香さんは九鬼さんに携帯の番号までは教えていない。入学時にメールアド交換したつきりだ。優香さんの秘密に踏み込みかねない者は可能な限り遠ざけておかなければならない。

東日本亞人協和会の懇親パーティーで知り合つて以来、九鬼さんは優香さんことをかなり気に入つていて、優香さんも「ちょっと苦手かな」とつて迷惑! 優香さんは「ちょっと苦手かな」とつて言つてゐるもん。

返信はすぐにきた。

『了解した。できれば一人つきりで会いたいんだがな。』

優香さまはあきれてため息。わたしは「黒子邪魔」といつ裏腹の文意に腹を立てた。

キンコオノカアンコオオン

6限終了。すべて世は事も無し、だ。

さきほど食堂から教室にもどったとき、授業がはじまる前に山田にさり気なく聞いておいたところでは、服部の放課後の予定は剣道部関連の挨拶だか稽古だかで埋まっている。

「清應名所めぐりは明日だねえ」と、いままさに山田が服部に話しかけているのが聞こえてきた。

「うあ……かがくのじかん、おわったの？」

優香さまのお田覓めだ。

「はい。もう放課後だよ。スタバに行こう」

「……ふたばつてなぬの？」

だめだ。いまの優香さまはかなりダメだ。

「黒子ちゃん」

「へ？」

突然声をかけられ振り返ると、山田と……服部だ！

「あのひ、服部さんと黒子ちゃんが話したいって」

「な……なに言ひてんの」のメガネ？ すいへ迷惑なんですか？

「え、ちよ、ほひ、わたしゃ、お姉ちゃんがこんな具合だからすぐに帰りなきゃ大変！」

優香ちゃんはカクンと首を横倒しにして、ゆらゆら危づけて身体を揺らしてくる。睡魔と戦つてこらのだらうか？

「え、西園寺さんなりこつもの」ムギヤー！」

思わず山田に飛びついて首を極めるわたし。おおやまだよしんでしまつとはなきない。

余情報。優香ちゃんはみんなに西園寺さんとか優香さんとか呼ばれていて、わたしは黒子とか黒子ちゃんって呼ばれています。いっしょにいるときは西園寺姉妹でひとくくり。

「……わかった。それでは、明日また」

服部はまったく動じず、無表情にそれだけ言つと、きびすをかえして教室を出て行つてしまつた。ポカーン。拍子抜けだ。

「ゲホ、ちよつとー 黒子！ いきなりなにするのー 死んだらどうするのー！」

復活した山田が涙ぐんでまくしたてる。

「「」ぬぐ「ぬん。つこ、ほひ、じう、ねー わかるでしょ？」

「ぜんせんわからんねえよー。」

なにはともあれ、うまく切り抜けた。山田のおかげか?

「ありがとう山田ー。」

「なんだせりやなめんなー。」

「おお、怖い。このメガネ、結構本氣で怒ってるぞ。」

「といひで服部さん、なんだって? どうしたの? どうして? ？」

「チツー! しまかしやがつて。まあいいわ。あのね、ちよつと気がなることがあるって言つてたわ。それだけ。黒子の方では心あたりなこの?」

「ないないない。ゼンゼンナイヨー。」

即答。

「ふうん。といひで、お姉さんが掃除の邪魔よ。」

指摘されて優香さまに振り返ると、あらかわいい! 組んだ両手を胸元に添え、小首をかしげるよひこして眠つている。おいたわいや。睡魔に負けてしまったんですね。

「与メるうつと携帯をいじりそ取り出しつづける掃除番の男子らを追い払い、優香さまの耳もとで口を寄せた。」

「お姉ちやさん、朝ですかね」

「んーん」

「お姉ちやさん、朝ですかね」

「んーん」

「お姉ちやさん、朝ですかね」

「んーん」

しかたがない。

「お姉ちやさん、朝ですかね。フツ」

耳に息を吹きかける。

「んー」

「おおおー」と周囲の男子がざよめぐ。優香とまは驚いてぴょこんと跳ね起きた。

「なに？ なに？ あれ、あの、ビーッしたの？ あ、わ、私ったら、その、ね、ねむく…」

瞬時に状況を把握した優香さま。声はか細くお顔はまつ赤である。ちよつといじわるな起こし方だったかもしけれないので、九鬼さんとの約束があるからいそがないと。

「それじゃ、バイバイ、また明日ー。」

強引に挨拶。さすと優香さまの手を握る。「わざわざ帰つましよつ」の合図だ。

教室を去り際、優香さまが赤面したままみんなに小さく手を振ると、同じく赤面気味の男子らが、おのおのいもじ趣味にサヨナラを返したのだった。やれやれ。

第9話・人間が好きです。

「わたし、バニラクリーミーフラペチーノ。トールで「私はこのヘーゼルナッツソイラテをアイスでお願いします。サイズはショート」

「俺、アイスコーヒー。トールね」

運よく窓ぎわの四人がけが空いていた。わたしと優香さまは並んで座り、九鬼さんに向かい合つた。

「それで、どうしたつて？」

九鬼さんはわたしがいるので機嫌が悪い。使い魔ふぜいが同席しやがつて！ そんな視線を感じる。わたしとしてはべつに、九鬼さんに対してへこへこおもねる必要なんてこれっぽっちもないから、コンニヤロと堂々にらみかえすわけだけれども。

「はい。あの結界。あれは九鬼さんに関係するものでしょうか？」

「なんだ、俺はてっきり君がなにか実験でもしてるのかと思つて無視したんだがなあ」

九鬼さんはキザつたらしく銀髪をかき上げながら言つた。どうやら関係ないらしい。

「ところどは

「ああ、俺はなにも知らない」

「そうでしたか。実は私のクラスに転校生があります

」

優香もまた簡単に事の経緯を説明した。

「つまり、この黒猫がドジって田を畠わしちまつたが、まあ怪我の功名、と」

あいでもしゃべるよしこして、なじむよしこ九鬼さんは言った。

「黒猫じゃない。わたしの名前は黒子です！」

「たかが使い魔がえつらそり」

あきれたよしこそつぽを向いて、ストローをくわえる九鬼さん。
「つまく隠してくるよしだがな、おまえの尻尾と翼、俺にはよく見えるぜ」

「…」

あわてて後ろ手に背中とお尻をチェックする。

「へへ、冗談だよ

冗談だつて？わたしは事実、真の姿を隠している。蝙蝠の翼と黒猫の耳、そして二股に分かれた尻尾を持っているのだ。人間社会

に生きるため、つねに徹底して隠している。本当に見えたのだろうか？ 魔力看破から推知したのだとしても異常な精度である。しかも、吸血鬼の力が弱化している日中であるにもかかわらず。『……危険だ。』

「九鬼さん。この子の名前は黒子です。無礼はゆるしません」

優香さまが微笑んで……お、怒つてる？

「無礼？ 僕が？ 『……お、おこない』

九鬼さんが中空で片手をぶらぶらさせて言った。

「無礼はゆるしません。『たかが使い魔』と」

一瞬、空気が凍る。優香さま……

「……ふん。あやまりはしないがね、今後からかうのはよしておこう。君のためにな」

『……』寧にわたしをひとりにらみして、九鬼さんは言った。

「感謝します。それでは、話をもじしましょつか。と言つても、すでに共有すべき情報は底をつけましたけれど」

「服部、だつけ？ どひする？ 消すのかい？」

物騒なことを言つ。『……本当に九鬼影光の息子か？ 発想が邪悪すぎる。』

「……九鬼さん、彼女はおそらく人間です。目的はわかりませんが、できることなら傷つけずに入れちがいたい」

「人間だからなんだってんだ。結界張つたり、わけのわからんものを見せたり、こっちの領域に足を踏み入れてるやつをかばうつもりか？」

「彼女が私たちに害をなそうとしているのだとしたら“対応”しなければなりませんが、そうでないなら、たとえ私たちにとつて都合が悪くても、決して関わってはならない。九鬼さんは今回のことには手を出さないでください。情報は逐一提供します」

「やれやれ、人間のフリをして、それが共存か」

九鬼さんは眉間に皺を寄せ、吐き捨てるように言った。

「私たちもよく“フリ”という言葉を使いますが、正確には決してフリではありません。私たちは人間でいられる、ということです。私たちの能力は私たちの領域においてのみ在ればいい」

優香さまの声は静かな、落ち着いたものだった。

「ばかな。この能力があつてこそ、影から人間を支配できようものではないか。それが“共存”だろうが」

「それは“共存”でも“支配”でもなく、単なる“寄生”でしょう。幼稚な乗つ取り行為に過ぎませんよ」

「ちがうね。種間競争の問題だよ」

「……九鬼さん。私は人間が好きです。人間が育んできたものがまぶしい。私たちの力に意味があるとしたら、それを守ることではありますか？ それを奪うことではなく、慈しむことではありますか？ 力に驕り、魅せられ、短絡的な欲求に埋没するのだとしたら、それは人間の醜い一側面を模倣しているにすぎません。私たちが感得すべきものは、人間たちの“愛”ではありませんか？」

わたしは思わず優香さまの横顔を見つめてしまった。遠い視線と、はかない微笑がわたしの胸を打つた。優香さまはテーブルの下でそつとわたしの手を取り、やんわり握ってくれた。

「愛？ 愛なら、おれたちにもあるだろ？？」

なぜかうるたえるようにして、九鬼さんは言つた。

「いいえ。残念ながら」

「たとえば……そうだな、血族の愛を信じないのか？」

「《真の始原的統一》は相違の意識のなかにこそある。その統一を、すべての者は充実したいと願い、またおののおのに与えうるちからがある。ぜひなく、わたしたちはすべての者を愛さなければならない。わたしたちはおののおのの代替不能の個体ではあっても、巨人でも神でも小人でもなく、ひとつ変わった異種同型体であるのだから。わたしたちはみな誰もがそうであることを知つてゐるがゆえに、お互に愛し合うことができる。……》」

「な、なんだ？」

キヨトン。九鬼さんもわたしも同じ表情をしていたと思つ。

「死んだ英國詩人の、ある長詩から。九鬼さん、おわかりになりませんか？」

「わからんね」

やれやれ、と言わんばかりのバタ臭いジェスチャーをまじえ、九鬼さんは深いため息をついた。

「人でないものの話はこれくらいに。あとは、これを飲み終わるまで閑談といたしましょ」

そう言つと、優香さまはいつものようにやわらかく微笑した。急に空気が軽くなる。店内のざわめきに空気が同調する。会話のイニシアチブは終始優香さまが握っていたようだ。

「なあ。やつぱり携帯の番号教えてくれないか？」

アイスコーヒーをすすりながら、ふてくされた声でアプローチする九鬼さん。

「メールで十分でしょ」

「じゃあ、今度のライブ観に来てくれないか？」

お~お~、「じゃあ」ってなんだよ？

「門限がありますので」

「あー、門限なんてないのに……優香さまHライー……」

その後は、わたしと優香さまで九鬼さんをからかって過ごした。
なんのへんてつもない放課後。フツーの高校生ライフを楽しんだ。
九鬼さんはいけ好かない野郎だけれど、ふむ、あえて三枚目に
甘んじる程度の度量はあつたようですね。

第9話：人間が好きです。（後書き）

W y s t a n H u g h A u d e n " N e w Y e a r L e
t t e r "

ドライヤーで髪を乾かしていくと、ベッドに放つておいた携帯が鳴った。この音は優香さまのメールだ。ちなみに、西園寺邸のすべての私室にはバスルームが設けられています。雰囲気は、帝国ホテル東京のモーテルームに近い感じ。ホームページに写真が載つてたんで検索してみてください。

タオルでくしゃくしゃ髪の水つ氣をとりながらベッドに腰を下ろす。携帯を手に取った。

『就寝前に私の部屋に来てください。服部さんの件で打ち合わせがあります。』

ついでに数学1の宿題も持つてこひ。あと、お借りしていたDSSソフトも返そうと。

薄暗い回廊の奥の奥、北翼行き止まりの部屋が『YUUKA'S ROOM』である。その手前が『京香亭』。京香さまは大阪出張でしばらくお留守。西日本亜人協和会の有力魔女である行徳静恵さまと会合だとか。

静恵さまのひとり娘である麗さまは現在中学一年生で、優香さまによくなついている。夏休み中、麗さまがこちらに遊びにいらしたとき、わたしと優香さまで江ノ島水族館に連れて行ってあげて、めつちやくちやようこひばれた。ああ、楽しかったなあ、夏休み終わっちゃつたんだよなあ……

ノック、ノック。すぐに「どうぞ」とうながされる。

ドアを開けると、書斎机から立ち上がってこちらに歩み寄る優香さまが見出された。ペイズリー柄のパジャマはシルク生地で大人っぽい。というか、なんというか、妖艶というか……しかしつくづく優香さまのお身体は謎なり。肌はすべすべだし、すっごい細身だし、なんか、む、胸もちょこっとあるような? ひんにゅう? ステータスか? いや、ん、どうだろ? ああ、でもそんなこと聞けないしなあ

「どうしたの? あ、黒子もお風呂上がりね、湯冷めしないように気をつけて」

「へ? あ、う、はい」

片手を頬に当てるし、ものすごい火照つてた。ばかだわたし。

「あ、優香さまコレ」

DVDソフトを渡す。

「あれ、『リズム天国』貸してたっけ?」

「はあい。なかなかおもしろかったです」

「ん。ありがと。あれ、それは?」

脇に挟んだノートと教科書に気づかれた。

「あのう、数1の宿題なんですか?……」

「まだやつてないの?」

「へんとうなずく。

「じゃあ、そつちが先ね。私の机を使いなさい。わからないうちはあつたら言こなさいね。教えてあげるから」

「へんとうなずく。小走りに机に向かった。
優香さまはベッドに腰かけ、サイドテーブルの文庫本に手を伸ばした。『ディケンズ短篇集』があ。

かりかり
ぱらり
ちくたく
かりかり
ぱらり
ちくたく

わたしのシャーペンの音と、優香さまがページをめくる音、それと時計の音だけ。現在時刻は9時25分。静かだ。

「ねえ、優香さま

「うん?」

なんとなく、声をかけてしまった。どうしよう。

「あの、えつと」

「うそ」

身をひねつて振り返ると、優香もまた文庫をぱたんと閉じた。

「や、その、今日の放課後のこと」

「ええ」

「人間が好きだって」

記憶が力チツとはまつて、するする思考がつながつていく。不思議だ。

「ああ」

「わたし、そういうこと、ちゃんと考えたことなくって、ただ人間のフリして人間となかよくなるのが楽しいからって、そのくらいしか頭になくて、だめだなあって……」

しぶりもどりひらひらと、優香さまはいつも same の笑顔を浮かべた。

「なかよくなるのが楽しいと思えるのはとても大切なことだわ。あとは言葉の問題よ。もちろん、言葉があつてわたしたちは考えるわけだから、その言葉によって裏づけられる想いや、あたらしい感情の発見はあるけれどね、でもそういうのは少しずつでいいのよ」

「でも

「悩んだり考えたりすることはずばらしい。でもね、自分のなかに
なにか欠落を感じて閉塞的に煩悶するのは不健康よ。それにね、私
には私の考えがあつて、あなたにはあなたの考えがあるのよ

「え、でも、わたしは優香さまの考えに従いたい……」

突き放されたような気がして、わたしはすがるよつに言った。す
ると優香さまはゆっくりと立ち上がりてわたしに歩み寄る。両肩に
そっと手がのせられた。わたしは机に向きなおり、包みこまれたよ
うな気持ちで目を閉じた。

「ふふ、ううね、こ、ううのはどうかしら？ 私はあなたに私が考
えていることを教えられる。そのかわり、あなたはあなたの考えを
私に教えて？ それならお互いに得るものがあつてフェアだし、得
たものは一人のものになる。そして一人のものになつたそれはお互
いの心のなかで別々に変化していつて、でもだから、いつかまた、
変わつてしまつたそれを確認しあつて、ひとつにとかしあわせ
ればいい。ね？」

「……う、く」

なぜか涙があふれてきた。悲しい涙ではない。ぜんぜん、そういう
うんじやない。でも、自分がなんで泣いているのかわからなくて、
わたしさは言葉を失つてしまつた。優香さまはわたしのあたまをそつ
とやさしくなでてくれて、それがまた涙を誘つた。

「泣き虫さんね」

なぐれぬよつなやせっこ声。

「ハハ、かわせ……」

それからわたしはひとりしきづぐじぐじ泣きつづけた。宿題は結局、三分の一くらいは優香さまに教えてもらい、残りは優香さまと式と答えの恩りし合せまでしてもらってしまった。

服部の件に関しては以下のことを厳守。

- (1)わたし(黒子)は靈感が強い、という設定で押すとおす。
- (2)優香さまは魔力を徹底的に殺して一般生徒でいつづける。
- (3)わたし(黒子)は服部と一人きりにならないようにする。

第1-1話・B型でしょー

「放課後、屋上で」

4限が終わつてすぐ、服部が声をかけてきた。

今朝はまた、わたしのバタバタのせいで本鈴ぎりぎりの登校になつてしまつていたし、授業と授業の間の休みは実験的に露骨に避けてみたから、服部もちよつとあせつたのだろう。さて、どう答へよう? とりあえず「了解」かな。

「わか
」

つた、と声を出したならば、

「こまいいでもいいでしょー? いつしょーじょはんを食べましょーよ」と、優香さまがわたしをさえぎるみつて提案した。すると服部は皿をぱちくりさせ、片手を口もとに寄せて思案はじめた。想定外だな、といった感じ。

沈黙。なんとなくつら。

「わたしたちは今日はお弁当だけれど……」

「ふぐあ! なんでわたしが助けぶねを?」

「……ああ、そうか。私は食堂だ。放課後ではだめか?」

服部は腕を組み、ややつむき加減に視線を落として言った。

「わか」

つた、と嘆息をした。「ほ、

「でも、屋上は生徒立入禁止ですよ。駅前のスターバックスではだめかしら?」と、優香さまがわたしをさえぎるように提案した。すると服部は田舎者ぽちくつさせ、片手を口もとに寄せて思案はじめた。想定外だな、といった感じ。

沈黙。なんとなくつらい。

「なんならわたしのせいでもいいよ」

なんで? なに言ひやがつてんのわたし? くうう……なぜかつい!

「待つてくれ。すたあばつくすとよ……なんだらうか?」

は?

「は? スタバだよスタバ」

「黒子、ちがつよ。ええと……あのね服部さん。駅前の喫茶店じやだめかしら?」

優香さまがやじじい口調で言ひなおした。あ、そつか。そういうことか。いや、でも御殿場市にもあるだろ、スタバ。……服部め、あやしいぞ!

「ん? ああ、喫茶店か。しかし、西園寺優香。優等生のきみが、

そんな不良のするようなことをしていいのか?」

「ちよ、おじおい、不良? 放課後に喫茶店に寄つて? ありえない
ありえない」

わたしはすっかりあきれはて、片手を中空でぶらつかせながら言つた。ありえないって。

「しかし

「服部さん。そういうことなら大丈夫よ。それとも、喫茶店ではいけない理由があるのかしら?」

「……!」

一瞬、わたしたちと服部の間に冷たい空気が流れる。優香さまは天使の笑顔で小首をかしげているけれど。

「あとね、服部さん。服部さんは妹に“だけ”用事があるみたいだけれど、私も同席させてもらいますからね」

こつこつ。優香さまは魔力をほとんどゼロにまで絞りこんでいる。優香さまほどの超大な魔力を持つていて、湧出する魔力を抑えのにも一苦労なはずなのだけれど、もはや傍らのわたしには検知不可能なほどだ。素質のある一般人の方がよっぽどわかりやすい。

しかしそういえば、いま目の前に対峙する服部からも、魔力的な気配は感じられない。先日の教壇でカタナを視認したときも感じられなかつた。ましていまは結界を張つていてる真つ最中なわけだから、とらえやすい状況のはず。

とすると、服部がクロなのを前提として推し量るならば、こいつ

もかなりの力量の持ち主。力の調節に長けているのだ。

「……わかった。放課後、その喫茶店に連れて行ってくれ

「ええ。それでは」

服部は無言でうなづき、きびすをかえして教室を出て行った。空気がやわらぐ。すると遠巻きに見ていたのだろう山田が小走りに寄ってきた。

「ねえ、どうしたの？ なんだって？」

「べつに。血液型を聞かれただけだよ。そういうの好きなんじゃないの？」

われながらテキトーなことを言ひ。優香さまは「やれやれ」といった感じでこまつたような微笑を浮かべた。

「血液型？ そういえば、西園寺さんと黒子ちゃんの血液型って？ あー、待つて、当ててみるから」

なんだ、山田もそういうの好きなのか。 ちなみに、魔女の血液型は人間と同じように峻別されます。使い魔の場合はいろいろですが、すくなくともわたしは人間と同じです。つづく、超常種は不可思議な生き物だなと思いますね。

「はいはい。当ててみ」

「黒子ちゃんはB型でしょ！ いや、むしろ《dB》って感じね。

気分屋で落ちつきなくて感情的でドジでマヌケだもん

「じこつ……

「西園寺さんはA型ね！ 繊細でやせこじくで、それでいて客観的で、なにより天才肌！ あと、おとなしそうでいて自分の考えをはつきり主張できる人！」

優香さんはまつまつ顔で、ほんのり頬を赤らめた。

「どう？」

なぜか見下すような視点で山田は嘲こ恥せりた。

「ううーー！ 合ひしるよ」

「くつへえんー！」

鼻高々だ。

「……山田は絶対B型だろ」

「よくわかったわね！ 意外じゃない？」

「じこつ……

「まあまあ、」はんを食べる時間がなくなってしまった。山田さんは私たちと一緒に食べませんか。お弁当でしょ？

「ううーー！ いま持つてくるからちょっと待つててねー！」

そう言ってドタバタ自分の席へ走つていく山田は、まったく学級委員らしからぬ落ちつきのなさをかもし出している。しかしあいつ、ダメな子っぽいのに成績優秀なんだよなあ。まあ、優香さまの方が上だけどなー！

「山田さんには、今日の放課後も服部さんは用事あるって言つておかなくてはね」

優香さまは学生鞄からお弁当を取り出しながら、つぶやくように言つた。

「私はエスプレッソチャココレートトロコフをショートでお願いします」

「えつと、わたしはジャバチップフラペチーノね！ グランデー！」

「……」

笑顔の店員さん。沈黙の服部。そして、なぜかオロオロしてしまったし。

「え、エーリーしたの服部さん、なんにする？」

放つておけばいいのに、なんとなくおせっかいしてしまった。わたしはいつも、寡黙なマイペース人間が苦手なようだ。

「……ああ、うむ。梅昆布茶を」

「あい！ 思わず大阪人的ツツツミをこれてしまいそうになってしまった。おまえなにいうとんねん！」

「ああ、ええと、あのね、服部さん」

優香さまがやんわつやせしに口調で言つた。

「うう、やうこつのはないの。このメーテーのなかかい、ね？」

「……ん？ ああ、なるほど。ふむ」

カウンターに置かれたメニューを見下ろす服部は、あいもかわらず無表情……かと思ひきや、眉間にしわを寄せて真剣そのものだ。

「……むひ」

「むひ。そして一分経過。おこおい服部、店員さんの笑顔がだんだんつらつらになつてきてるよ。

「ええと、あの、服部さん？ 甘いのは大丈夫？」

見かねてか、優香さまが善意の誘導を開始。

「む、あ、ああ……甘いのか……ふむ、甘いのはまったく嫌いではないぞ」

「それじゃあ……そうね、この抹茶クリーミーフラペチーノはどうかしら？」

そう言つて優香さまがメニューを指し示すと、服部はじつと食い入るように商品の写真を注視した。なにを力んでいるんだか。

「それでは、この抹茶くりこむふらわペえのにしよう。サイズは一番大きいものを」

「え、。一番大きいのって、あの“▽”ってやつ？」

▽=ベンティ=590円。 あ、ちなみにグラントは470円です。

服部は「つむー」と力強くうなずいて、わたしの顔をじっと見つ

めた。

「な、なに?」

「……黒子、あなたのね、」

クスッといだずりっぽく笑つて優香さまは言つた。おぼえてたのか……

昨日と同じ窓際の席が空いていたので、わたしたちはまたそこに腰を下ろした。わたしと優香さまが並んで座つて服部に対峙。位置関係も昨日といつしょだ。

「さて。西園寺黒子

「あー、黒子でいいよ。つていうか、フルネームは変でしょ。わたしももう服部つて呼ぶから」

「そりが。では黒子。君はこれまで……いや、单刀直入にいこう。見ていてくれ」

そう言つて、服部は握り締めた右こぶしをわたしの前に突き出した。

「な、なんだよ」

動搖のそぶりを演じながら、わたしは服部がアレを見せるつもりでいるのを十全と察知していた。優香さまは悠然となんとかかんと

かトリコフを飲んでいた。『我関せざ』って感じ。

「……常行所當行自持必令強」

服部がぼそぼそとなくやうつぶやくと、ソレはまばたきの一瞬間にでも現れたかの「ことく」突如として全的に具象化した。ゆるくゆらいだ刃紋が魔力的な燐光を放っている。……抜き身のカタナだ。わたしはあえて身をそらし、顔をこわばらせた。優香さまはまるでなにも見えていないかのよう、不安げな視線をわたしに注いでいる。

「黒子。やはり君は……見えているな」

例の「」とく無表情。感情が読めない。

「は、服部！ おまえナニモノダ！」

われながら思ひ、なんてわざとじにセリフだらう。 しかもちよつと棒読みになってしまった。

「あわてないでくれ、危害を加えるつもりは」

「服部わん」

優香さまが服部の言葉を切り止める。たぶん、わたしの下手な演技では危ういと判断されたのだろう。スミマセン……

「あのね、服部さん。妹はいまのいままで、普通の人には見えないものを見てきて、すうじくつらいい思いをしてきたの。私にはなにもわからないけれど……わからないからこそ、この子を普通の、平和な

世界につなぎとめることができる、そう信じています。そしてこれからもずっと、そういう気持ちでこの子を守っていくつもりなんですよ。……わかりますか？」

「、優香お姉さま。嘘八百なのに、わたしたら感動します！」

「……あ、う、うむ」

服部は優香さまのまっすぐな視線に圧されたかのよつて、弱々しく同意した。それとともに溶けるようにカタナが消える。

消え方といい現れ方といい、なんとなく不思議だ。自在性が使役的でない。あまりにも自然すぎる。

わたしや優香さまの魔力行使は弾丸を撃つようなもので、放った魔力は一時的に減殺されるのだが、服部のカタナは分離的でありますからも手足のように繋がっている。それがどこか奇妙に感じられるのだ。おそらく“チャンネルが違つ”のだろう。

「私はあなたが悪い人間ではないだろうと判断したうえで、こうしてお話を聞くことに同意をしました。でも、もしもあなたが、あなたの問題に妹と私を巻き込もうとしているのだとしたらご容赦願いたいわ」

優香さまは、ほんの少し語調を強めて言った。わたしはうつむき加減に服部を觀察しつつ、フラペチーノのホイップクリームを味わつた。甘くて冷たく美味しい。

「ま、巻き込もうだなんて……思つて、ない。ただ……」

とりあえず、優香さまの仰つたよう悪い人間ではなさそうだ。しかし、たとえ服部に悪気がなくとも、こいつの抱えこんでいるもの

がわたしたちに害をなすことは大いにありうる。状況は悪くはなっていない。しかし、よくもなつていないので。

「ただ?」

優香さまが、視線をそらす服部の顔を覗きこみながらうながした。

「ただ、警告と……その、頼みごとが」

「警告と、頼みごと、ですか。でもまずは、あなたが何者なのかを知りたいわ」

優香さまと服部の視線がぶつかり合つ。

「わかった。順を追つて話そつ」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1123f/>

めえる ういっち

2010年10月11日01時02分発行